

今井道雄先生

東大谷を退職してすでに八年。今年の三月で齢まさに満の七十三。昨今、ことに年をとるのが早くなったような気がしてなりません。気がするだけではありません。あとわずか二年足らずで、私もあの差別的な後期高齢者の部類に無理矢理押し込まれてしまうこととなります。しかしながら、これには、ここ数年（ということは、定年退職後）、私が日々励んでいる「老活」なるものが大いに与っている、という認識が、私にはあります。

昨今、なぜか理由はよくわかりませんが（まさか男女の仲が本質的に疎遠になりつつあるということではない、とは思いますが）婚活（結婚活動？）が大変なようです。婚活と並んで、というかそれ以上に（これは理由がはっきりしています）不況下での就活が予想以上の苦境に立たされているようです。私の言う「老活」なるものも、婚活、就活に劣らず、大変なことは大変なのではありますが、これは、人生の後始末というか、老いるための活動、さらに死の仕事（死も、ちゃんとした仕事でなければなりません）に就くための準備活動ということであって、質的には、婚活、就活とはいささか趣を異にするというか、意味合いが違います。

病院通いが多くなりました。月に一、二回はいやでも国民健康保険高齢者受給者証をあっちこちの病院の受付に提示しなければなりません。尿検査、血液検査、レントゲン、MRI、CT造影検査、PET・CT検査、経鼻胃内視鏡検査……、朝夕食後の各種飲み薬。こうしたことも、もちろん「老活」の一部です。（さっき後期高齢者という差別的な言葉をちょっと持ち出しましたが、この際いっそ、たとえば八十ないし八十五歳以上を非差別的な「末期高齢者」とし、医療費自己負担はもちろんのこと、各種納税、国民健康保険、介護保険など各種保険料、交通費、各種公共施設利用経費……などを全額免除にしてもらえれば、死の仕事にもっぱら精励している高齢者は、大いに助かるわけですが、どんなものでしょうか。死の仕事を粗略に扱ってはなりません。最大限、社会的に庇護すべきです。日本国憲法は、個人の尊厳を謳っていますが、個の死こそまさに尊厳そのものであり、その仕事に携わる末期高齢者には、さまざまな特典を設けて尊厳を徹底させねばなりません）。「老活」は、広い範囲に及んでいます。食事の後片付け、洗濯、風呂掃除、本棚の整理、読書、パソコン、庭仕事、家屋のちょっとした修理、昼寝、図書館通い、散歩、フィットネスクラブ通い（但し、健康保持のためというより精根尽き果てるのが狙い）、山登り（近頃の中老年登山の事故多発、困ったものです）、買い物、飲酒（これこそがわが「老活」の主力か）等々……。これら日々の活動がすべて、さらに老いるため、死の仕事に就くための準備、就活ということであり、いうまでもなく、なかば意図的、なかば私自身の意思とはかかわりなく行われている日常の営為なのです。つい先だっても、こんな文章を書きました。

*

雨かと思ったら、そうではなくて、空からいろんな動物が降ってくる。そうして地面に降り立った動物たちが、ぼくのまわりに集まってきて、今日はいいいお天気だから、みんな

で遊ぼうとさかんに催促する。冗談ではない。ぼくにはしなければならない仕事がいっぱいあって、空から降ってきたきみたちと遊んでなんかいられない。ぼくが動物たちの誘いを拒否すると、かれらは、ワンワンと鳴き、ブーブーと唸り、ガオーと吠え、ヒヒーンと嘶き、カアカアと喚いて、ぼくを猛烈に非難し、でも、ここはもうこの世じゃないよ、この世じゃないから、仕事なんかありっこないよ、もうみんな、この世からリストラされて、いまは無職なんだ、もちろんあんたも、と口々に言う。言われてみれば、たしかに、しなければならない仕事が具体的に何なのか、ぼくにはさっぱりわからない。しなければという切迫した気持だけがあって、それでは何をする、という段になると、仕事の中身がまったく見えてこず、途方に暮れるばかりだ。あの世って、そういうところなんだ。この世からリストラされて、あの世に送り込まれ、そこでは誰も彼も例外なく無職、もう働く機会などいっさいない。動物たちが催促しているとおりに、みんなといっしょに遊ぶしかない（子供の世界のような）ところに、どうやらぼくは来てしまったらしい。

ただ、それでもなお、しなければならない仕事がある、という気持だけが居残っていて、そこがなんとも健気なようで、（この世への未練も透けて見えて）すこし切ない。

*

もちろん、遊ぶのも、「老活」の一つです。ただし、この歳では、遊ぶといっても、鬼ごっこ、クチクセンカン、宝島、野球、縄跳び、ビーダマ、メンコ……などはちょっと似合いません、昔は恥ずかしくなるほど好きだったハナイチモンメも。いまでは、せいぜいそこらを歩き回るか、昆虫や小鳥や野草や梅、桜、藤など花木をウオッチングするか、猫とじゃれあうか、雀と一緒に弁当を広げるか、丘や川岸に腰を降ろして、雲や水の流れるさまを眺めるか、好きな本を読むか、居酒屋で一杯やるか、その程度のことなのですが、これもやはり立派な「老活」、けっして気紛れでやっているものではありません。日々、「老活」だというちゃんとした意識を持って精励しているつもりではあるのですが、反面では、さっきも言ったように非意思的、自然的な、ごく当り前の日常の活動というわけです。

むろん、昨年で二輯目になった「手帖M^老残抄V II」なるささやかな書き物も、「老活」の一つ、というよりその柱になる営為、死の仕事に就くための準備活動の中核であることはいまでもありません。私のかく言う「老活」が、どんな陰翳を持っているか、「老残抄」をばらばらと拾い読みして推測していただければ、たぶんわかっただけのものではないでしょうか。

*

若干蛇足という気がしないでもありませんが、おしまい、内面というか、心境というか、近頃のが心の佇まいについて、こんなたとえなしで近況をお伝えしたいと思いません（むしろ、こっちのほうがほんものの近況報告と言っていいかもしれません）。

*

^おんぶおばけに手を出すなV

「さあ、おぶってあげよ」

そういつて、大きな背中を向け、おんぶおばけは、わたしを誘いました。

子供のころ、遊び疲れて、日暮の道をとぼとぼと歩いていると、道端におんぶおばけが、よく出てきたものです。疲れた、腹がへった、それに足もちょっぴり痛い。そんなわたしを見透かしたように、おんぶおばけが待っていて、わたしの前で背中を向けて身を屈め、「おぶってあげよ」、そう呼びかけるのでした。

おぶってもらって、らくちんになりたいのはやまやまですが、わたしは、おんぶおばけのその背中をいつもきっぱりと拒否しました。わたしはこわかったのです。なぜなら、もしこの誘いに乗って、おぶってもらっていたら、そのままどこへつれてゆかれるか、知れたものではない、と思ったからです。たとえば、異人さんにつれられてってしまった赤い靴の女の子のように、もう二度とお家には帰れなくなる、そんな予感がしたのです。

すこし大きくなると（中学生になったころからか）、おんぶおばけは、わたしの前から姿を消しました。日暮の道を歩いていると、道端で私を待っていることもなくなりました。そして、わたし自身もいつのまにかおんぶおばけのことはすっかり忘れ、つい最近までたえて思い出すこともありませんでした。なぜそうなったのか、わかりません。人間としてすこしは強くなったということなのでしょう。

ここ何十年か、おんぶおばけと無縁だったわたしも、古稀を過ぎ、はや七十のほぼ半ばにさしかかりました。目にすこし霞がかかり、耳が遠くなり、歯もがたがた。足腰にもなんとなく自信がなくなってきました。

出たのです。二年ほど前から、わたしの老いを見透かしたように、またあのおんぶおばけが道端にあらわれたのです。

昨日も出ました。近くの池に釣りにいったの帰り道。転がっていた石ころに躓いて、まさに老いのもろさ、たあいなく膝をついてしまいました。とくにどこを打ったというわけでもないのに、すぐには立てず、しばらく膝をついたままじっとしていました。

「さあ、おぶってあげよ」

目の前に、おんぶおばけの大きな背中があらわれ、昔とちっとも変わらない優しい声で、年老いたわたしにそう呼びかけました。

自分に対するころもとなさ、それに懐かしさも手伝って、わたしは思わずその背中に取りすがろうとしました。が、手を出しかけたところでかろうじて自制し、危うく思いとどまることができました。

老いの弱りから、うっかりおんぶおばけにおぶわれたりしたら、それこそどこへつれていかれるか、昔とちがって、いまのわたしはちゃんと知っています。

不帰の客、という言い方があります。あれです。この年になると、あれしか考えられません。不覚にもおんぶおばけの誘いに負けて、ひょいとその背中に乗っかってしまえば、もうそれっきり行く方知れず、永遠に消息が絶えてしまうことぐらい、誰にだってわかりきったことではありませんか。

みなさん、おんぶおぼけの甘い誘いには、くれぐれも気をつけましょう。油断は大敵です。

*

昨年の後半期猛威を振るった新型インフルエンザもようやく下火になり、いよいよ春。もう花咲くことのない老いの身にすらなにやらあやしげな萌えの兆しが蠢きだしてくるような気がしないでもありません。でも、さっきも言ったようにやはり油断は大敵。どんな新手のインベーダー（鳥・豚はいちおう済んだようですから、今度はさしずめ牛・馬インフルエンザなんか）が侵入してくるやもしれません。とにかくにも、皆様方には御自愛専一にお過ごし下さいますよう。 2010・2・23 記